

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370540

研究課題名(和文) 英語の間接指令構文の認知言語学的研究

研究課題名(英文) A Cognitive Linguistic study of Indirect Directive Constructions in English

研究代表者

高橋 英光 (TAKAHASHI, Hidemitsu)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10142663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：まず、英語の間接指令構文15タイプの相対的使用頻度を算定し各々の構文で好まれる動詞グループを特定した。この結果、個々の指令構文はポライトネスに加え命題内容に違いがあること、tellは指令構文でもっとも高頻度であり「情報」が英語の指令行為の中で重要な役割を果たすことを解明した。

さらに、命令文で見られる「動詞+1人称代名詞」連続は多くの間接指令文にも見られ、この項構造をとる動詞が構文により異なることを明らかにした。最後に、命令文で見られる間投詞と談話標識用法は間接指令構文にはほとんど見られず、常識とは逆に、間接指令構文は命令文以上に「純粋な」指令表現である可能性がある。

研究成果の概要(英文)：A total of fifteen different types of Indirect Directive (hereafter, ID) Constructions in English were identified and their relative frequencies were calculated. These ID Constructions were found to differ not only in the nature of politeness but in propositional content as well. In addition, TELL is the most frequently used verb with directive constructions as a whole, a finding suggesting that the act of seeking information plays a central role in directive speech acts in English.

Furthermore, the verb plus first-person pronoun sequence was found to be prevalent in the majority of ID Constructions as well as imperatives whereas the specific verbs that preferentially occur significantly vary among different ID Constructions. Finally, interjectional and/or discourse-marker uses that are quite common with imperatives were hardly witnessed with ID Constructions. Contrary to common belief, ID Constructions can be hypothesized to be "more genuinely" directive than imperatives.

研究分野：英語学

キーワード：間接指令文 認知言語学 頻度 動詞 項構造

1. 研究開始当初の背景

先行研究は、命令文の「無礼さ」を強調し「丁寧な指令には命令文 (= 直接指令文) を避け間接指令文を用いる」という定説を繰り返して来た。例えば、言語行為論者のサールは「単純命令文 (Leave the room.) を使うのは丁寧さを考慮すると不恰好」(Searle 1979: 36)と述べ、心理言語学者のクラークとシャンクは「英語話者は依頼をする時、Tell me the time. のような直接的依頼表現を避ける」(Clark and Schunk 1980: 111)と指摘した。また語用論者のヴィアズヴィッカも「英語の命令文の使用に課される重い制限」(Wierzbicka 2003: 30)を指摘する。これらは「間接指令文は丁寧な表現」という暗黙の前提の裏返しでもある。以上の定説がもし正しいならば英語話者は命令文の代わりに間接指令文を頻繁に使用するはずである。

しかし申請者が行った統計調査では、間接指令文はすべての例を合計しても命令文の15分の1の使用頻度に過ぎなかった (Takahashi 2012: chap.4)。この事実は「間接指令文は丁寧な命令文」という言語学の定説や暗黙の前提に重大な不備があることを示唆する。不備の主な原因は、大部分の研究が実例の観察を重視せず、作例と直感に分析を依存したこと、狭い人工的文脈に分析を限定したこと、さらに統一的分析を可能ならしめる包括的パラメーターを構築しなかったことにある。

上記の限界を克服するため、申請者は、アメリカのミステリー小説4編の中の指令表現 (命令文 1774 例に対して間接指令文の総数 113 例) を収集・分析した。さらに、筆者は命令文のプロトタイプの主要基準である力の行使 (Force Exertion) の6パラメーター理論 (DESIRE, POWER, COST, ABILITY, BENEFIT, OBLIGATION) を開発した。これはパラメーターと数値計算を合体させて実際の命令文を精密に特徴付ける装置である。その結果、英語話者がどのような文脈で命令文を避け間接指令文を選ぶのかという問いについては「英語話者は負担 (COST) が大きく義務 (OBLIGATION) が低いほど大きなサイズの指令表現を選ぶ」原理にたどりついた。つまり負担と義務が指令文の選択の中心的要因であり、先行研究でしばしば指摘された対人的・社会的力や心理的・社会的距離は決定的な要因ではないことが判明した。しかし、申請者の2012年の研究では多様な間接指令文の個々の意味・使い分けと命令文との比較は十分に説明されないままであった。

2. 研究の目的

具体的には、Takahashi 2012年の研究では以下の3つの重要な疑問が残った。第一に、ある間接指令文 (例えば、Could you VP?) と別の間接指令文 (例えば Would you mind VPing?) を比較した時、一方が適切で他が不

適切な文脈とはどのようなものだろうか? また、丁寧さの度合いと個人の表現の好みの問題は別にして、いずれの構文も適切に使える文脈とはどのようなものだろうか? 逆に、いずれも不適切なのはどのような文脈であろうか?

第二に、従来の分析は間接指令文の指令内容 (命題内容) にはほとんど注意を払わなかった。しかし、英語話者が多様な間接指令文を用いる時に指令内容にも違いがないだろうか? 申請者による1774例の英語命令文の動詞の調査では、let'sを除いた頻度ランキングは、(1) tell 105 (2) let 104 (3) look 98 (4) come 78 (5) get 74 (6) take 64 (8) be 60 (9) go 50 (10) give 46 (以下省略) という結果であったが、これらの動詞については、情報を求める指令 (とくに tell, give)、注意を喚起する指令 (look, come(on))、話者の謙虚さ (丁寧さ) を示しつつ聞き手に許可を求める指令 (とくに let) が際立っていた。これらの観察はつぎの新しい疑問を生んだ。命令文と間接指令文とは指令内容自体に違いがあるのではないか。加えて間接指令文の間でも指令内容に重要な違いがあるのではないか、違いがあるとしたらどのような違いか。

第三に、命令文では tell, let, give の三動詞の過半数が me を目的語としており、この「動詞 + 1人称代名詞」項構造は命令文のプロトタイプの反映と分析し、forgive, excuse, believe, trust も同じ傾向が示すことが確認された (Takahashi 2012: chaps 2-4)。しかし間接指令文について同じ現象が見られるか否かは不明であった。もし、同じ現象が見られるなら、「動詞 + 1人称代名詞」項構造は命令文のみならず指令文の一般特性ということになりこれは当該分野における大きな発見となる。

以上の3つの疑問に答えるのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、(i)アプローチ、(ii)使用データ、(iii)分析の観点、にそれぞれ特色がある。まず、(i)本研究テーマ「間接指令表現」は語用論の分野に属する現象だが、語用論的アプローチではなく、申請者が独自に開発して命令文分析で成功を収めた認知言語学的アプローチを用いている。予備調査では、例えば Would you mind VPing? 構文の場合、コストがきわめて高く、聞き手は行為を遂行する能力を有するが、利益がもたらす話者のものであり聞き手に従う義務は本来ない、ことが判明している。このアプローチは他の指令文の特徴付けにも非常に有効であり貴重な知見を生み出すことが期待できる。

つぎに、(ii)フィクション・データとコーパス・データの2種類のデータ使用も特筆に値する。多くの言語研究は1種類のデータしか採用しない。コーパス・データは類例を容易に大量収集し統計処理を行える利点がある

が、文脈情報が十分に得られない。このため本研究が行う各指令構文の力の行使の「パラメーターと数値」分析に適さない。フィクション・データは統計的分析に適さないが、完全な文脈を提供するため指令構文の力の行使の「パラメーターと数値」分析に適している。申請者は、命令文の分析において2種類のデータの利点を最大限に生かし命令文の特徴づけをすることに成功したが、本研究でも2種のデータを効果的に使用している。

4. 研究成果

(1) 29編のフィクション・データに基づき、英語の代表的な間接指令文 15 タイプを特定し、個々の相対的使用頻度を特定することにも成功した(表1を参照)。

疑問文型	<i>can you</i>	<i>could you</i>	<i>will you</i>	<i>would you</i>	<i>would you mind</i>
総件数 901	197 21.9%	50 5.4%	106 11.8%	93 10.5%	13 1.0%
<i>can't you</i>	<i>won't you</i>	<i>Why not</i>	<i>why don't you</i>		
26 2.9%	5 0.5%	14 1.6%	170 18.9%		

平叙文・条件節型	<i>I want you to</i>	<i>I need you to</i>	<i>I'd (would) like you to</i>
総件数 901	148 16.2%	29 3.2%	12 1.3%
<i>I wonder if you can/ could/ would</i>	<i>I'd appreciate it if you could/ would</i>		<i>If you 'll/ will 'd/ would</i>
12 1.3%	12 1.3%		14 1.6%

表1. 間接指令文 15 タイプの相対的使用頻度 (Takahashi 2014a: Table 4 より)

英語の間接指令文でもっとも使用頻度が高いのは *can you* 型 (21.9%) で、逆に *would you mind*, *I wonder if you*, *I'd appreciate it if you* はもっとも使用頻度が低い。一般に否定型は使用頻度が低いが、*why don't you* と *I want you to* が *can you* に次いで使用頻度が高く、当初予想しない結果も得られた。

間接指令文(の一部)について好まれる動詞グループを特定した。全体の使用頻度ランキングでは、*tell* が一番で、以下 *be*, *give*, *do*, *come*, *go*, *get*, *help*, *take* が続いたが、その一方で、*can/could you* では *tell* がもっとも頻度が高いが、*will you* では *be*, *come*, *do* が上位になって *tell* は5位以下に下がった。また、*why don't you* では *go*, *come* がもっとも頻度が高いという結果が出た。

個々の構文によって使用頻度ランキングが異なることは、構文間で指示内容(命題内容)に違いがあるという当初の仮説が裏付けられた。

(2) 命令文動詞に見られる間投詞用法と談話

構成用法は(*can you* など)間接指令構文には見られないことを明らかにした。この成果は、常識的理解とは逆に、間接指令構文のほうが命令文より「純粋な指令」表現であることを示唆するものであり指令文研究へ貢献するものが大きい。

(3) 命令文に見られる「動詞+1人称代名詞」連続 (*let me*, *tell me*, *give me* など)は少なくとも六種の代表的間接指令文 (*can you*, *could you*, *will you*, *would you*, *I want you to*, *why don't you*) にも見られることを明らかになった。さらに「動詞+1人称代名詞」連続を具現しやすい動詞は命令文と間接指令文間で共通点と相違点があることを明らかにした(例えば、*marry me* は *will you*, *help me* は *can you/will you* と、*excuse me* は *will you/would you* と結びつく頻度が高い)(表3を参照)。

<i>tell me</i> :	命令文と多数の間接指令構文
<i>give me</i> :	命令文と多数の間接指令構文
<i>marry me</i> :	<i>will/would you</i> のみ
<i>let me</i> :	命令文のみ
<i>believe me</i> :	命令文のみ
<i>trust me</i> :	命令文のみ
<i>forgive me</i> :	命令文のみ
<i>excuse me</i> :	命令文と <i>will/would you</i>
<i>help me</i> :	<i>can/could you</i> と <i>will you/would you</i>

表3. 「動詞+1人称代名詞」連続と指令文の相性(Takahashi 2015b)

(4) *tell* が指令構文全体の典型的動詞であることを突き止めたが、*tell* の優先的項構造が *can you* 構文と命令文とで異なることも当初まったく予測しなかった貴重な発見である。この分析結果は、*tell* などの典型的指令構文動詞が異なる指令構文中で多様に異なる優先的項構造をとる可能性を示唆し、個々の構文の意味機能の解明につながる。

(5) *I wonder if you* 構文が指令的談話の導入部と結論部で使用可能だが *I'd appreciate it if you* 構文は結論部でしか使われないことが観察された。異なる指令構文は談話内の位置が異なることが示唆される。この結果も今後の指令的発話行為の研究の新しい地平を切り開く可能性がある。

(6) 「受益二重目的語構文」(例えば、“*Cry me a river.*”)が命令文で適切になる事実は1970年代から知られているがその理由は長らく謎であった。2003年に提唱された「間接目的語の利益」の制約(Takami 2003)は画期的だが、筆者はこの制約だけでは不十分であり、命令文の「動詞+1人称代名詞」連続の偏在性と「命令文の強い感情表出性と聞き手指向性」も受益二重目的語構文の適切性に貢献していることを論証した。

<引用文献>

Clark, H.H and D.H. Schunk, Polite responses to polite requests, *Cognition*, 8, 1980, 111-143

Searle, J. R. *Expression and meaning: Studies in the theory of speech act.* Cambridge UP, 1979

Takahashi, H. *A Cognitive Linguistic analysis of the English imperative: With special reference to Japanese imperatives,* John Benjamins, 2012

Takami, Ken-ichi, A semantic constraint on the benefactive double object construction, *English Linguistics*, 20, 2003, 197-224

Wierzbicka, A, *Cross-cultural pragmatics: The semantics of human interaction,* Mouton de Gruyter, 2003

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

高橋英光、Cry me a river. はなぜ適格かー英語の二重目的語構文と命令文の融合がもたらすもの、*日本認知言語学会論文集*、第16巻、査読無、2016年、(ページ未定)

高橋英光、A usage-based analysis of indirect directives in English (3): I wonder if you, *Journal of the Graduate School of Letters, Hokkaido University*、査読無、10、2015、pp. 27-40

高橋英光、英語の命令文-量的分析と質的分析、*エネルギー (ドイツ文法理論研究会機関誌)* 査読無 (招待原稿) 第37号、2014、pp. 1-17

高橋英光、A usage-based analysis of indirect directives in English (2): I'd appreciate it if you, *The Annual Report on Cultural Science, Hokkaido University*、査読無、144、2014、pp. 1-29

高橋英光、A usage-based analysis of indirect directives in English (1): A preliminary quantitative survey, *The Annual Report on Cultural Science, Hokkaido University*、査読無、143、2014、pp. 99-135

[学会発表](計8件)

高橋英光、英語の間接指令構文再考 - I wonder if you と I'd appreciate it if you -、*言語と情報研究プロジェクト*第53回公開セミナー、2015年12月4日、広島大学、広島大学大学院総合科学研究科、広島県広島市

高橋英光、Cry me a river. はなぜ適格かー英語の二重目的語構文と命令文の融合がもたらすもの、*日本認知言語学会*第16回大会、招聘発表、2015年9月12日、同志社大学、京都府京都市。

高橋英光、A new look at indirect request forms in English: When each form prefers to occur and what it prefers to convey、*国際語用論学会*第14回大会、2015年7月26~31日、アントワープ、ベルギー王国

高橋英光、Another glance at verbs and constructions: A perspective from English directive constructions、*国際認知言語学会*第13回大会、2015年7月20~25日、ニューキャッスル、英国

高橋英光、コロストラクション分析の落とし穴、*日本英語学会*第32回大会シンポジウム、頻度と言語研究を考える、2014年11月9日、学習院大学、東京都豊島区

高橋英光、英語の命令文 神話と現実、*日本英文学会北海道支部*第58回大会、市河賞記念講演、2013年10月5日、北海道大学、札幌市

高橋英光、英語の命令文-量的分析と質的分析、*ドイツ文法理論研究会秋の研究発表会*、招待講演、2013年9月28日、北海道大学、札幌市

高橋英光、Exactly how indirect directives differ from and are similar to imperatives: Beyond the "politeness" account、*国際語用論学会*第13回大会、2013年9月8~13日、ニューデリー、インド

高橋英光、Distinguishing between different indirect directive constructions: Six-parameter approach、*国際認知言語学会*第12回大会、2013年6月23~28日、エドモントン、カナダ

[図書](計2件)

菊地 他、*研究社、言語学の現在を知る* 26考、2016年、総ページおよび担当ページ未定

森雄一・高橋英光、くろしお出版、*認知言語学 基礎から最前線へ*、2013年、pp. 2-12 および pp. 139-153

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 英光 (TAKAHASHI, Hidemitsu)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 10142663

(4)研究協力者

森 雄一 (MORI, Yu-ichi)

西村 義樹 (NISHIMURA, Yoshiki)

大橋 浩 (OHASHI, Hiroshi)

長谷部 陽一郎 (HASEBE, Yoichiro)